

主な参考文献

- 新潮日本古典集成源氏物語（全八巻） 新潮社
新編日本古典文学全集 源氏物語（六冊） 小学館
謹訳源氏物語（一〜十） 林望著 祥伝社
源氏物語（一〜六） 紫式部著、円地文子訳 新潮文庫
源氏物語（上、中、下） 紫式部著、角田光代訳 河出書房新社
週刊絵巻で楽しむ源氏物語 五十四帖（全六十巻） 朝日新聞出版

はじめに

推しが見つかる源氏物語 平安ヒロイン事典

大河ドラマの主人公に紫式部が取り上げられました。

紫式部といえは『源氏物語』です。世界最古の長編小説であり、日本が誇る物語です。この作品に関心はありながらも、読むことに大きなハードルを感じている人が多いのではないのでしょうか。

そんな人にまず知ってもらいたいと、『源氏物語』に登場する二十人の女性たちを紹介しました。素直になれない人もいれば、気の強い人、自由奔放な人、クールな人など、一人ひとりが個性的です。その中にはきっと、あなたの「推し」になる人がいるのではないのでしょうか。そしてそれが、『源氏物語』の壮大で深遠な世界に踏み出していきつきかけになればと思います。

『源氏物語』のヒロインたちは、現代の私たちと同じように喜んだり悩んだり悲しんだりしています。

たとえば、『源氏物語』には両想いの幼馴染みが登場します。この二人は成長するにつれ惹かれあつていきますが、父親同士がライバル関係にあるため引き裂かれてしまうのです。対立する家の子供同士が恋に落ちるところは、さながら平安版の「ロミオとジュリエット」といえましよう。

光源氏の長男・夕霧ゆきぎりと、光源氏のライバルである頭中将の娘・雲居雁くもいのかげです。この二人がその後どうなるかは、改めてご紹介したいと思います。

また、恋人ができないのもつらいけれど、二人の男性から言い寄られたらどうでしょう。どうしても一人に決められず、結果、失跡し川に身を投げようとなりました。しかし、記憶を無くし倒れていたところを助けられ、周囲の反対の中、最後には一人になっても自ら決めた道を生きていこうと踏み出す女性がいます。

ドラマのような話ですが、ヒロインの一人、浮舟うきふねです。

ほかにも光源氏と結婚し、苦労を重ねてよきパートナー、相談相手になつていった女性があります。しかし支え合つても心の底までは理解し合えず、すれ違いばかり。人生の寂しさを感じるのです。やがては完全に頼られきつてしまい、「私がいなくなつたらこの人どうなるか

しら」と心配せずにいられません。

光源氏が最も愛したヒロインである紫むらさきの上うへです。

長編小説で登場人物が多いのは困りものですが、女性たち一人ひとりのことを知ると、『源氏物語』の内容が少しずつわかってきます。

この中にあなたの推しはいる？ 個性豊かな二十人

これから、『源氏物語』に登場する二十人の女性たちを紹介していきます。

- 一、葵の上…プライドが高く、ツンデレな、光源氏最初の妻
- 二、六条御息所…独占欲が強いけれど、センス抜群のインテリ美人
- 三、空蟬…秘めた恋心とあるべき姿の間で揺れる中流貴族の妻
- 四、夕顔…ミステリアスな魅力で男性を虜にする儂げな佳人
- 五、末摘花…不器用で頑固だけれど、一途さは誰にも負けない深窓の令嬢
- 六、朧月夜…自由な生き方を愛する情熱的で奔放なお嬢様
- 七、朝顔の姫君…聡明で冷静沈着、独身を貫く才女

- 八、花散里…上手に悩み相談にのれる、心優しい癒し系の人
- 九、桐壺の更衣…僂げでいじらしい光源氏の母
- 十、藤壺…何もかもに恵まれた、光源氏あこがれの女性
- 十一、紫の上…可愛らしくて機転が利く理想のヒロイン
- 十二、明石の君…家族の幸せを願って人生を歩む忍耐強い母
- 十三、女三の宮…いくつになっても無邪気な箱入り娘
- 十四、玉蔓…物事に上手に対応できる容姿端麗なお姫様
- 十五、秋好中宮…いちばん安定した人生を送った母親想いの高貴な人
- 十六、雲居雁…幼馴染と恋に落ちた、明るく庶民的なヒロイン
- 十七、弘徽殿女御…味方になると心強い、パワフルで頼りになるお局様
- 十八、大君…妹想いのひかえめで奥ゆかしい姉
- 十九、中の君…人生の荒波にも前向きに対応する前向きな妹
- 二十、浮舟…ドラマチックな人生を歩む最後のヒロイン

この中で、あなたの「推し」のヒロインを見つけてみてください。

第一回 葵の上

光源氏の最初の妻・葵の上はツンデレなお姫様！ 不器用さが魅力のヒロインを解説

まず取り上げるのは、光源氏の最初の妻となる葵の上あおいです。

葵の上は身分の高い家に生まれたお姫様で、プライドが高く、素直じゃないところがあります。いわゆる「ツンデレ」タイプなのですが、素直になれず、強がってしまう不器用な人、あなたの周りにもいませんか？

端然として理想的な妻の一面もある葵の上を紹介しましょう。

【今回のおもな登場人物】

- ・葵の上…この回の主人公あおい
- ・光源氏…葵の上の夫ひかるげんじ
- ・頭中将…葵の上のきょうだいで、光源氏の親友とうのちゆうしやう

- ・六条 御息所…光源氏の愛人
- ・左大臣…葵の上と頭中将のお父さん

光源氏と政略結婚！ 最初からギスギスした二人

葵の上の父は左大臣、母は帝の妹で、とても身分の高い両親のもとに生まれました。

将来は皇太子（将来、帝になる人）の妃にふさわしい女性となるよう、とても大切に育てられたのです。ところが父は、皇太子ではなく、帝が一番可愛がっていた二番目の息子である光源氏と葵の上を結婚させることにしました。いわゆる政略結婚です。

葵の上からすれば、もっと高い身分になれるはずだったという思いもあり、誰よりも大切にされて当然と考えています。一方、夫となった光源氏は藤壺ふじつぼという女性にアコがれていたため、葵の上を大切にしようという気持ちになりません。結婚したものの、最初からギスギスしていた二人なのでした。

葵の上の兄弟で、光源氏の親友・頭中将とうのちゆうじやうは、何事にも落ち着いて対応できる葵の上は結構理想の妻なのだと思います。しかし光源氏は、隙がないからこそ一緒にいても心が休まらななんだ、という気持ちでした。

葵の上の性格が分かる二つのエピソード

結婚後、光源氏に対してずっとそっけない葵の上。

そんな葵の上のツンツンしている性格がよくわかるエピソードを二つ紹介しましょう。

①療養明けの光源氏に放った一言

結婚して六年が過ぎた頃のこと。体調を崩してしばらく療養していた光源氏が、久しぶりに葵の上のもとを訪れました。久しぶりに会ったというのに、葵の上はまるで絵に描いた物語のお姫様のように座って身じろぎもしません。

光源氏は、「私は病気で苦しんでいたのに、「具合はどうですか？」と聞いてくれないんですか？」と葵の上言葉をかけました。この時の葵の上の様子が次のように書かれています。

「具合はどうですか？」と聞かないのはひどいことでしょうか」と、流し目で光源氏を見る葵の上のまなざしは、たいそう近づきたい気品に満ちてうつくしい。